

審議会等の会議結果報告

1. 会 議 名	第1回 松阪市教育改革推進会議
2. 開 催 日 時	令和5年3月20日（月）午後2時00分～午後4時05分
3. 開 催 場 所	松阪市教育委員会事務局 教育委員会室
4. 出席者氏名	（委 員）◎岡野会長、○中村副会長、竹内委員、山中委員、山本委員、鈴木委員、山口委員、西村委員、高橋委員（◎会長 ○副会長） （事務局）中田教育長、刀根事務局長、村田事務局次長、尼子参事兼教育総務課長、大辻参事兼学校支援課長、金谷学校教育課長、中西子ども支援研究センター所長、池田生涯学習課長、若山スポーツ課長、瀬古給食管理課長、北畠教育政策担当主幹、南教育政策担当主幹兼教育政策係長
5. 公開及び非公開	公 開
6. 傍 聴 者 数	1人
7. 担 当	松阪市教育委員会事務局教育総務課 TEL 0598-53-4381 FAX 0598-25-0133 e-mail syom.div@city.matsusaka.mie.jp

検討項目

- ・松阪市の教育を取り巻く現状と課題について

議事録

別紙

第1回 松阪市教育改革推進会議 議事録

1. 日 時 令和5年3月20日（月） 午後2時00分～午後4時05分
2. 場 所 松阪市殿町1315番地3 松阪市教育委員会事務局 2階 教育委員会室
3. 出席者 委員：岡野委員、中村委員、竹内委員、山中委員、山本委員、鈴木委員、山口委員、西村委員、高橋委員
事務局：中田教育長、刀根事務局長、村田事務局次長、尼子参事兼教育総務課長、大辻参事兼学校支援課長、金谷学校教育課長、中西子ども支援研究センター所長、池田生涯学習課長、若山スポーツ課長、瀬古給食管理課長、北畠教育政策担当主幹、南教育政策担当主幹兼教育政策係長

4. 内容

1. 教育長あいさつ
2. 委嘱状の交付
3. 自己紹介
4. 松阪市教育改革推進会議条例、松阪市教育改革推進会議部会運営要綱について
5. 会長・副会長選出
6. 協議事項
 - ・松阪市の教育を取り巻く現状と課題について
7. その他

内容は以下のとおり

司会 定刻になりましたので、ただいまから、第1回松阪市教育改革推進会議を開催させていただきます。

まず、「会議の公開について」でございますが、松阪市が定める「審議会等の公開に関する指針及び運用方針」に基づき、松阪市が行う会議は原則公開と定められておりますことから、本日の会議においても、公開とさせていただきますので、ご了承のほど、お願いいたします。

本日、委員お一人から欠席の連絡を頂戴しております。

それでは、事項1、教育長からあいさつをよろしく申し上げます。

教育長 (あいさつ)

司会 ありがとうございます。

続きまして、事項2の「委嘱状の交付」に移ります。教育長から委員の皆様へ委嘱をさせていただきます。順にお名前をお呼びしますので、その場でご起立をお願いいたします。

(教育長から委嘱状の手渡し)

司会 委員の皆様、どうぞよろしくお願いいたします。
次に、事項3の「自己紹介」に移ります。本日は、第1回目の会議ということで、委員の皆様から自己紹介をお願いしたいと思います。

(各委員から自己紹介)

司会 ありがとうございます。
次に、事項4の「松阪市教育改革推進条例、松阪市教育改革推進会議部会運営要綱」につきまして、事務局からご説明を申し上げます。

(事務局から条例と要綱の内容について説明)

司会 ただいま、事務局からの説明に対し、ご意見・ご質問等はございませんか。
よろしいでしょうか。
次に、事項5の「会長・副会長の選出」に移ります。この会議の会長、副会長につきましては、条例第5条の規定によりますと、委員の互選により定めることとしておりますが、いかがさせていただきますでしょうか。

(事務局一任の声あり)

司会 ありがとうございます。事務局一任とのお声を頂戴しましたので、事務局から提案させていただきたいと思います。

事務局 ありがとうございます。会長は岡野委員に、副会長は中村委員に、それぞれお願いしたいと考えており、提案させていただきます。

司会 委員の皆様にお諮りします。ただいまの事務局からの提案に、ご賛同いただける方は、拍手をお願いいたします。

(拍手)

司会 ありがとうございます。それでは、会長は岡野委員に、副会長は中村委員に、それぞれお願いいたします。
岡野委員、中村委員におかれましては、それぞれ会長席、副会長席にご移動ください。

(座席移動)

委員

各所属の担当業務と課題を聞いていて、一つは、コロナ禍で全国的にも不登校の児童生徒数が増えているという現状があり、松阪市はどうするのかと思っていましたら、学校支援課長から詳しいお話を聞くことができました。実は私もソーシャルスキルトレーニングというのを聞いたことはありましたが、どんなものなのだろうと思っていました。地域と協働して学校を運営していく学校運営協議会の取組を進めているのですが、学校支援課の担当者にも来ていただいて、学校運営協議会について説明を受けただけでなく、この2月には学校運営協議会のある中学校で子どもたちと一緒に活動できる機会がありました。そこで私が驚いたことは、こういう活動は児童生徒の満足度や自己肯定感を高められる、非常に有効な手立てであると感じました。実際に私たちも知って、一緒に体験してみることでよく分かることがありますし、保護者や地域に開かれた学校になることにも繋がると思います。継続してやっていくことで、子どもたちも自分が必要とされていることが分かると思います。いろんな課題もあると思いますが、今後も続けていっていただきたいです。

委員

先日、飯南中学校のスリンプルプログラム、イータイムの発表に参加させていただきました。2年生の生徒さんと嬉野中学校の先生と私と4人になって、アドジャンをさせてもらったのですが、何かあったら大人の私が助け舟を出そうかなと思っていたら、生徒さんのほうが助け舟を出してくれました。その時は、自分の自慢について話しましょうという課題で、「私は子どもと仲良くしています」と言ったら、すかさず「すごく素敵ですね」というような言葉を、目と目を見て話すことができる、目と目で対話するというのをすごく感じることができました。子どもたちって大人が思っている以上に毎日学習を重ねていて、生徒さんも最初は気恥ずかしさを感じていたけれども、徐々にどうしてこれをやっていくのかという目的も見えてきて、お互いを知ろうとする気持ちとか、自分で表現するということはすごく大事だから、「やってみよう」というのが「できた」に自然に変わっていったようです。さらに話を聞いてみると、「今日はクラスの子だけじゃないから大丈夫かなと不安だったけど、聞く姿勢を持った方々が前に座ってもらったので、すごくありがたかったです」と言ってくれたことも、私は感動しました。会場の体育館には、地元の住民自治協議会や社会福祉協議会の方など、たくさんの方がいらっしやって、子どもたちを中心に据えて、保護者や教職員だけでなく、地域にお住まいの皆様も一緒になって子どもたちを育てていくという松阪市がめざす教育の方向性について身をもって体験できたことが非常に良い経験となりました。

私はこの一年間で、いろいろなPTA活動をさせてもらう中で、松阪GIGAフェスタでお話させてもらうこともありました。私のこどもは高校生で、松阪での小中学校生活を振り返る機会があったようで、高校で自己紹介の際に「私の地元は松浦武四郎さんの町です」と言ったそうです。「小学校と中学校で武四郎学習を受けてきて、自分も誇りを持っているから。」とっていました。小中学校の9年間で先生方が掛

けてくださった「先を見ていけ、未来を見ていけ。」という言葉。自らの夢や未来を切り拓く力を育むということ、子どもたちは常に心の中に持っています。小学生の頃から地域で学んでいく中で、松浦武四郎さんを誇りに思う気持ちを育て、中学校に行ってもその気持ちを大事にして、松浦武四郎さんのような、強く広く心の優しい人になりたいという思いがあったからこそ、きっとその場でそう言ったのだと思います。こういうことって、親から高校の自己紹介の時にそう言いなさいと言われても言えないことだと思います。

また、子どもは、きょうだいタブレットで学習しているのを見ると、羨ましいと言っています。タブレットに今までの学習履歴が蓄積して、前の学年の時の学習状況を自分で振り返ったり、先生や家族と振り返れたりできるので、自分の時にはなかった学習の仕方が羨ましいと言います。

松浦武四郎さんや地域の偉人を誇りに思うとかそういう大事な事はずっと大切にする一方で、社会変化に伴って最新の大事なことを取り入れながらアップデートしていている松阪市の教育は、教育長がいつもおっしゃる不易と流行を実践しておられるのだと感じました。こういった教育は、中学校を巣立っていった子どもたちが、松阪を誇りに思い松阪に戻って働きたいと思う原動力になると思います。これからは教育長がそうやって発信していただくことが、子どもたちにとっては励みになり、喜びになっていると思いますので、これからも期待しております。

委員

今まで学校ってゆっくり進んでいくものだと思っていたのですが、この5年間で一気に変貌を遂げたという印象を持っています。コロナ禍でピンチが訪れたという要因もあるかとは思いますが、学校ってここまで急激に変わることができるんだと。コロナで休校となり、子どもたちの学びは止まりました。しかし、ICT教育が劇的に進化し、オンライン授業が可能となり、タブレット端末から子どもたちの顔を見ながら授業ができるようになったし、今では子どもたち自らタブレット端末を活用して学習に取り組む姿も多くみられるようになりました。

また、今年度、教育委員会が不登校対策について必死になって取り組んでいることが伝わってきています。これだけ本気で対策してもらっていることは、学校側からしても非常に心強く思っています。もちろん全ての不登校が解消されるわけではありませんが、粘り強く取組を進めていただけており、成果や課題を学校側にも共有していただき、一緒に解決策を考えていきたいと思っています。

委員

私は年配の方々への健康体操教室を主宰していますが、家族が同じ場所でキッズダンススクールを主宰しており、毎日たくさん子どもたちが来てくれています。コロナ禍になってスタジオでのレッスンが止まりましたが、オンラインレッスンや動画配信での自宅練習などで、子どもたちは練習機会を失うことなく、発表会に合わせてきます。このような活動ができるのも全ての学校でタブレットによる学習が浸透してきたことが大きいのかなと感じています。

また、ある高校から依頼がありまして不登校の子どもたちにスタジオへ来ていただきヨガ体験をしていただきました。子どもたちの不登校対策の一助になるのなら今後も協力させていただきたいと思っていますので、お声がけください。

委員 学校現場におけるタブレット端末の活用について、お話しさせていただきます。引っ込み思案な子どももいて、クラスの仲間の前で音読や外国語の発音を披露することが苦手であったりします。そのような場合、自宅でタブレット端末に録音してきて担任に提出することも可能となっています。このことは、誰ひとり取り残さない教育にも繋がっていくと思いますし、タブレット学習により学習の幅が確実に広がってきていることを実感しています。

委員 約10年ぶりに教育委員会関係の会議に参加させていただきましたが、その頃にはICT教育の分野は、一切、議題に上がっていませんでした。当時は、ここまでICT教育が進展するとは想像もしていませんでしたし、子どもたちの学び方も教職員の働き方も大きく変化したと感じています。これから子どもたちはこのような情報活用能力を活かしつつ、検索して出てきた内容を整理して判断して正しいもの導き出す力を身に付けていくことだと思えます。しかし、直接、人と話して解決していくような力も大切にしなければならないと思っています。教育委員会や学校には、子どもたちに対して、何をICTに求めて何を人に求めればいいのかということについても大切に教えていただけるようお願いしたいと考えています。

会長 ありがとうございます。委員の皆様のご発言を聞かせていただいて感じたことを整理させていただきたいと思えます。

1人1台タブレットの配備によりほぼ情報格差がなくなったということが言えると思えます。仮想空間ではありますが、言語の壁も越え、リアルタイムで情報を受け取れるようになりました。ただし、体験の格差はある意味で広がったとも言えます。この部分をどう捉えて考えていくのかということが、各委員が心配され、危惧される部分であり、それは、人間としての社会情動的スキルがベースにない限り、認知的スキルは培われることはないし、仮に培われているとしても、それはかなり怪しいものではないか、ということでした。このことはOECDで学術的にも解明されていて、学びと収入との関連性として、社会情動的スキルが高い子どもほど学力などの認知的スキルが伸びていて、その結果、持ち家率や平均月収が高くなるということがわかっています。3年間のコロナ禍に起因する学びの回復は、とてつもなく影響が大きくて、3年で回復できるものではありません。これを取り戻すには、かなり手厚いフォローが必要です。周囲の人々の聴く力、子どもたちは聴いてもらう力を身に付けない限り、人に助けを求める力には結びついていかず、他者と繋がる力にはならないと思いますので、ソーシャルスキルをいかに身に付けていくのかという部分を基盤にして認知的スキルを伸ばす取組を進めていく必要があると感じて

います。

学校は改善でなく改革している。市教育ビジョンを読み進めていると、例えば、いじめの早期発見・早期対応というのがありますが、これは既に事案が起きてしまっています。でも、未然防止という観点、発想の転換です。アメリカでは「30秒でいじめの6割が止まる」という研究結果も出ています。これを言われたときに、長年教育に携わってきた先生方は、「そんなことあるのか」、「どのような指導方法なんだ」という疑問に駆られますが、そのような学術データが既に公表されています。いじめの現場に遭遇した傍観者がただ「やめなよ」と言うだけのことなんです、この行動で6割が止まるということです。これまでの学習指導は、「やはたのおすし」ということで、「やめてと言いましょ」「その場からはなれましょ」「たすけを求めましょ」などですが、これとは全く異なるものですね。これまでは無記名でアンケートを実施するなどだったと思います。そういう意味では、学校の中で改革可能な余地はまだ残されていると感じています。

教育にICTが出てくると、サービス産業のように捉えられることがあります。しかし、ここで大切なことは、教育はサービスでなく次世代に対する責任であると言い切ることができるかどうかと考えています。そういう意味で国はリカレント教育をめざしています。三重大でもリカレント教育センターを開設しようとしています。義務教育は15歳で終了しますが、学びは生きるということであり、人生においては義務教育以降のほうが長いので、学びなおすというよりは、どのように学び続けていくことができるのかという方向で、私たちに何ができるのか、私たちがどう関わることができるのか考えるタイミングを迎えていると感じています。

学校は、特定の年齢の子どもたちが集まって学ぶ場だけではなく、子どもたち、教員、保護者、地域住民も一緒に学び合う場として、コミュニティセンター機能を果たすことができないかということを検討する必要があると感じています。コミュニティセンターの中に、公民館も学童施設も民間施設も入っていますし、スポーツの捉え方、部活動の地域移行の考え方も入っています。現在の学校は、同じ世代の子どもたちが集まっているから優劣を付けてしまうことになりませんが、そこに集う世代の多様性、様々な世代が関わることによって、子どもたちの視野も広がりますし、他者の視点取りができるようになっていきます。コミュニティセンターとして多世代の人々が学び合い育ち合う場所、市民教育です。これは理想論のように捉えられることもありますが、この市民教育という分野は、教育委員会でやるべきなのかなと思っています。あらゆる分野に関わる教育という意味で、教育委員会は次世代の市民を育てていく役割を持っているといえるのではないのでしょうか。単にICTを使いこなす教育ではなく、社会に参画するため、社会を変えていくためにICTを活用する。そのような意味でのICT教育を推進していくことが必要であると感じています。このような内容をキーワードで表すと「学びの共同体」という表現になります。学校を子どもたちが学び合う場所にするだけでなく、教師たちも専門家として学び育ち合う場所とし、親や市民も改革に参加し協力して学び合う学校づくりを

